

退職にあたって

「アブラカダブラ」だか、「アブラブ」だか、何だかわからないのだが、近頃奈良文化財研究所にはどうやらこんな名の仲間が生まれたらしい。言割っておくが他人に迷惑をかけることのないいたって善良な同好の仲間らしい。どうも「明かり」をテーマにしていって、考古・文献・庭園・分析科学といった異分野の研究者からなり、日本列島ばかりか韓国や中国にも同志がいて、きわめて学際的かつ国際的である。いかにも奈文研らしい研究の芽である。私の知るところ、奈文研にはこのような芽がいくつも育っている。そしてこの明かりの芽には石灯籠の職人さんにも仲間の輪が広がっている。何時の日かこの小さな灯芯に、明るく暖かい火が灯ってほしいものだ。

平成24年は奈文研創設60周年の年にあたり、これを記念した企画に「奈文研親子教室」があったのをご記憶の方も多いだろう。これは夏休みの企画で、奈文研探険ツアー（平城編、藤原編）と染色体験とがあった。本番当日は、真夏の太陽が容赦なく照りつける暑い日だったことを今もよくおぼえている。

それから秋が来て11月初旬に、小さな僕とお母さんが奈文研に私を訪ねてきてくれた。少年の態度から訪ねようとしたのは、少年の方であることがすぐにわかった。そして彼は、そう勇気を振り絞って「お楽しみ会に来てください」と一息に大きな声で言ってくれた。お母さんが、少年と奈文研探険ツアーに参加したこと、お楽しみ会は幼稚園の企画であることを話してくれた。たしか復原なった大極殿を探険している時に、「僕の幼稚園がここから見える」と教えてくれた男の子がいた。今春に小学校に上がるその少年が、今も夏の企画を忘れないでいてくれたことを知ったその刹那、皆の努力でなった夏の奈文研企画は大成であったことを知った。

染色に使った藍には、その後秋になって花壇で白い上品な花が咲き、初冬に結実した。その種子についてホームページのほかに新聞に掲載され、北は青森から南は福岡まで、種子希望の電話がきてお送りした。きっと今年の春には日本の各地で家族で藍の種子を撒き、可愛い芽が出て、梅雨時の雨を吸って大きく育ち、間違いなく真夏の青空色が染まるだろう。藍は、強くて、そして美しいのだ。

（副所長 深澤 芳樹）

奈文研での30年

奈良の記憶は、小学生の頃、幾度となく父母に連れられて訪れた平城宮大極殿の土壇や周囲の田んぼで、瓦の破片を拾い集めたこと、飛鳥寺や石舞台等、不便なバスを待って巡ったこと等様々だ。高校生の頃、進路をきめるのに、いくつもの夢の中、一つあきらめ、またあきらめしているうち、考古学しか残らなくなった。関西では面白くないので、わざわざ入学した東北大学では、旧石器研究が主流で、最初、前期旧石器を志したが、辛くも逃れ、捏造事件の外に留まることができた。たまたま発掘に参加した縄文貝塚で、貝殻と共に出土するシカやイノシシの骨を見た時、縄文時代の食料残滓^{ざんし}、つまり遺跡の生ゴミの研究から、社会全体を復元しようと閃き、そのまま一生のテーマとなった。

しかし、日本の考古学は文学部に属し、動物骨について基礎から学ぶことができず、米国に留学して学んだ。学生時代は、石器時代の貝塚にしか興味がなかったのも、自分自身、奈良文化財研究所に就職することになるとは、その直前まで予想もしていなかった。人生万事塞翁が馬、とはよくいったもので、東北大学在籍が10年を迎えようとした頃、奈文研の埋蔵文化財センター研究指導部長だった佐原真さんに誘われて奈文研を受験し、幸い合格することができた。

奈文研に来てからは、2年間、平城宮の発掘を手伝っただけで埋蔵文化財センターに移り、そこで専ら動物考古学・環境考古学の研究に専念させてもらった。奈良に来ると縄文貝塚にはるかに遠く、見るのは牛馬の骨ばかり。佐倉市の大古墳群から馬具を装着した馬が出土した際、大化の薄葬令^{はくそうれい}で禁止された、亡き人の馬の殉殺だったことをあきらかにできた。大阪府城山遺跡の奈良時代の溝から出土した馬の解体痕と、脳髓の摘出痕から、養老厩牧令^{ようろうくもくりやう}の官馬牛が死なば、「皮脳角胆」を収めよ、という記載と合致し、延喜式の鹿皮を鞆^{なめ}す際に脳を和えとする記述から脳漿鞆^{のうしょうなめ}しに思い至り、慶州でも類例を見つけた。奈文研にいたお陰で、その後も栗津湖底遺跡、原の辻遺跡、真脇遺跡、東名遺跡等、数々の重要遺跡の発掘にかかわり、自分自身の研究法を実践できたことは、研究者冥利に尽きると感謝している。

（埋蔵文化財センター長 松井 章）